一粒の麦

ヨハネ福音書12:20-26

【新改訳 2017】

12:20 さて、祭りで礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシア人が何人かいた。
12:21 この人たちは、ガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。
12:22 ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポは行って、イエスに話した。
12:23 すると、イエスは彼らに答えられた。「人の子が栄光を受ける（その）時が来ました。
12:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。
12:25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。
12:26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることになります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」

【祈りながら考えよう】

（１）主イエスにお目にかかりたいとピリポに頼んだギリシャ人はどんな人たちでしたか。

（２）「人の子が栄光を受ける（その）時が来ました」（23節）とはどういう意味ですか。

（３）「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます」（24節）はどういう意味ですか。なぜこのように語られたのですか。

【解　説】

（１）ギリシャ人たちが主にお目にかかりたいと頼む

さて、祭りで礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシア人が何人かいた。この人たちは、ガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポは行って、イエスに話した。（20-22節）

これらの「**ギリシャ人たち**」がどんな人物であったかについては、注解者たちがいろいろと推測している。彼らが全くの異教徒でなかったことは、彼らが過越の祭りで「**礼拝のために上って来た**」人々であったという表現からも明らか。

異教徒はいかなる者も過越の祭りに加わることが許されなかった。彼らは生まれつき異教徒であったが、ユダヤ教に改宗した人たち、生ける真の神を信じる改宗者たちであった。彼らはユダヤ教の祭りに出席するのが普通であった。

ここに述べられている出来事は、主がろばに乗ってエルサレムに入城をされた日とは同一ではないと思われる。このような理由から、この節と前の節との間には、一日か二日の間があったという注解者の意見を採用したい。

なぜギリシャ人たちが、他の弟子のところではなく、ピリポのところへ来たのかはわからない。推測されるのは、ピリポは北ガリラヤの町の住民であり、ツロやシドンに近いので、他の弟子たちよりもギリシャ人と親しかったのではないかということである。しかし、この理由は、ピリポと同様にガリラヤ人であったアンデレ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネのすべてにも適用できる。ピリポの名前が、他の使徒の誰よりも、よりギリシャ的であるということは、注目に値する。ピリポは恐らくギリシャ人の親族か、縁続きの者がいたことを示しているようである。

ベツサイダの名が挙げられていることは、次の節でピリポがアンデレに話したことの理由を示している。ベツサイダはアンデレとペテロの故郷であり、ピリポは彼らと同郷の者であった。

ギリシャ人たちがベツサイダ出身のピリポの所に来て、主イエスにお目にかかりたいことを申し出ると、ピリポはアンデレの所へ行って相談し、ふたりして主イエスの所へ行って、そのことを話した。

（２）一粒の麦

すると、その時、主は言われた。

イエスは彼らに答えられた。「人の子が栄光を受ける（その）時が来ました。まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」

主は弟子たちの心の状態を知っておられた。弟子たちは主の勝利に輝くエルサレム入城と、ギリシャ人のような見知らぬ人が主にお目にかかりたいと求めて来たことによって興奮していたのを、主は知っておられた。

イエスは、弟子たちが、栄光に輝く王国が間もなく樹立され、そこにおいて主要な地位と、権力と、権威を得ることを、ひそかに期待していることを知っておられた。主は彼らの考えの誤りを正し、主が彼らに繰り返し語られたご自身の死について思い出すようにさせられた。

「わたしが栄光を受ける（その）時が確かに来ました。わたしはこの世を去り、天の父のみもとに上ります。この世に下って行うべきわざを成し遂げ、高く上げられようとしているのです。わたしの地上における謙卑（けんぴ）のわざは終わりつつあり、わたしの栄光の時が近づきつつあります。しかし、これらすべてのことは、あなたがたが考えているのとは、非常に異なった方法でもたらされるのです。

わたしはまず十字架にかかろうとしているのであって、王座に着こうとしているのではありません。わたしはまず有罪とされ、十字架にかけられ、殺されるのです（ルカ24:26）」。

主はここで、非常によく知られた自然の事実を例に用いて、聖書の偉大な真理を示しておられる。すなわち、植物や種においては、それが死ぬことによって生命がもたらされるということである。種は地に蒔かれ、腐り、滅び、死ななければ、実を結び、穀物を生産することはできない。

もし私たちが、種を地に埋めることを拒み、蒔くことをしないなら、決して収穫を刈り取ることは出来ない。もし麦が実ることを願うなら、それが死ぬことに満足しなければならない。

この美しいたとえが示している霊的真理の富は非常に大きい。キリストの死は、この世にいのちをもたらすものである。非常に多くの実を結ぶ種のように、キリストの死から、魂に対する祝福と、神に対する栄光という豊かな収穫が、やがてもたらされるのである。

十字架上において主が身代わりとなり、贖いの死を遂げることは、失われた世に対する言い表すことの出来ない祝福をもたらす糸口となるのである。主が死なないように望み、主が死ぬという考えを嫌うことは（弟子たちは明らかにそうしたのであるが）、種を倉庫にしまったままにして、蒔くのを拒むのと同様に愚かなことである。「わたしは麦の種です」と主は語っているように思われる。

「わたしが死なない限り、あなたたが個人的になんと考えていても、わたしがこの世に来たことの目的は果たせない。しかし、もしわたしが死ぬなら、多くの人の魂が救われるのだ。」

私たちはここで、主がご自身の死に非常な重要性を与えられたことに注目したい。キリストの十字架上における犠牲の死のみが、この世の罪のための贖いであるという聖書のこの基本的教理以外には、このことを説明できるものはない。

キリストの死は殉教の死、あるいは自己否定の模範としての死にすぎないと考える人々は、このような聖句を決して完全に説明し尽くせない。キリストの死はそのようなものより、はるかにすばらしく、はるかに重要なものである。

それは麦の粒が、その死によってすばらしい霊的収穫をもたらすために死ぬことなのである。キリストの身代わりの死が、この世にいのち・救いをもたらすのである。

（３）主に仕える者たちの覚悟

さらに主は、ご自分に従って来る者たちにも、同じ覚悟が必要であることを、今度は比喩的な言い方ではなく、はっきりと示された。

「**自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることになります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。**」（25-26節）

人生で大事なものは食物、衣服、そして楽しみである、と考える人は多い。彼らはこのようなもののために生きる。しかし、こうして自分のいのちを愛していくうちに、魂の方がからだより大事であるということが分からなくなる。魂の健康をないがしろにする結果、いのちを失ってしまうのである。

他方、すべてのことをキリストのために損と思っている人がいる。**「私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、その熱心については教会を迫害したほどであり、律法による義については非難されるところがない者でした。しかし私は、自分にとって得であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。それは、私がキリストを得て、キリストにある者と認められるようになるためです。」**（ピリピ3:5-8）

キリストに仕えるために、彼らは人々の間で高く評価されるものを無視する。こういう人々こそ、自分のいのちを保って永遠のいのちに到る人である。自分のいのちを憎むというのは、自分のしたいことよりもキリストを愛するという意味である。

キリストに仕えようと思うなら、そのあとに従って行かなければならない。キリストのほうで、しもべたちがご自分の教えに従えるようにし、内面がご自分に似た者に変えられるようにしてくださる（Ⅱコリント3:18）。

しもべは、キリストの死という模範を自分自身に適用しなければならない。しもべには、ひとり残らず、主人である方の絶えざる臨在と保護が約束されている（ヨハネ10:28-29）。しかも、その約束は、現在だけでなく永遠にまで及ぶ。

今、主に仕える人は、やがて来たるべき日に神の称賛を受ける。地上でどのような辱めやあざけりを受けても、天において父なる神から公に称賛を受ける栄光と比べるなら、比較にならない。